

令和3年9月17日

南の風 For Junior6 /

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

ドリブルスクリーンからのモーションオフェンスの例です。

アライメント（配置）は、トップ、左右のウイング、左右のコーナーより1～2mの内側にそれぞれ一人ずつとします。トップとウイング間の距離は、約5～6mです。

始めに選手の皆さんに共通理解してほしいことは、『決まった形に当てはめて攻めることが目的ではない』ということです。ドリブルスクリーンというツールを使って、ギャップやノーマークをつくって攻める、ということです。

まず上の3人（トップと両ウイング）が、ドリブルスクリーンを掛け合うことで、自分に付いているディフェンスとのギャップをつくるようにします。ドリブルをしている選手、あるいはハンドオフパス（手渡し）を受ける選手は、自分に付いているディフェンダーの状態とペイントの状態（スペースがあるか、またはフラッシュする味方がいるかなど）を観察します。

ディフェンスがドリブルスクリーンに掛かれば、ドリブルドライブでペイントを攻めます。前が空いていればそのままレイアップにいきます。ダイブしたりスペースにカットしたりする味方がいれば、パスを考えます。ドライブに対してディフェンスのヘルプが来れば、アウトナンバーの攻めになります。

選手の皆さんには、こういった全体像をしっかりと把握して取り組むことが大切です。ドリブルスクリーンを使いながら、自分が気づいて、判断して、プレーする習慣をつけてください。

これらのこと踏まえた上で、ドリブルスクリーンの細かい掛け方について書きます。

トップが右ドリブルから開始したとします。右のウイングはディフェンスのウイークサイドにカットするフェイクを入れて、ドリブラーとドリブルスクリーンを仕掛けます。このとき自分のディフェンスをドリブラーにぶつけるように、お互いの右肩がこするようにクロスします。ドリブラーは、一旦止まってハンドオフパスする方法もありますが、ここではクロスしながらハンドオフパスします。このパスのやり取りの注意点は、ドリブラーは近づくウイングの選手とクロスする瞬間に、片手でハンドオフパスすることです。前にパスしてしまうと、ディフェンスにチェックされることがあります。

パスを受けたウイングは、ディフェンスやペイントの状況（自分がノーマークか、スイッチディフェンスがいるのか、また空いている味方がいるかなど）を視ます。※ここではドリブルを続行します。

左のウイングは、トップと右ウイングのドリブルクロスにタイミングを合わせるように、ドリブラーの外側にクロスします。パスの受け渡しは、右ウイングの場合と同じです。

左右のコーナー近くの2人の動きは、ドリブルスクリーンの上3人の動きを見て、ポストフラッシュするかステイしてスペースを取るかを判断します。1人がポストアップしたらもう1人逆サイドにカットして、自分のディフェンスを引き付けておきます。ペイントを空けて攻めやすくすることが重要です。

ドリブルスクリーンに慣れるために、繰り返して練習し習慣化することは、スキルが身につくためには大事なのですが、目的はギャップを攻めることやスペースに気づき、そこを突くことですから形にとらわれ過ぎず、自分で判断することを大事にして取り組んでください。